

研究ノート

「障害受容」は一度したら不変か

—— 視覚障害男性のライフストーリーから考える ——

田 島 明 子*

1 はじめに

筆者は、田島 [2005] において、障害を持つ人たちの「障害受容」に関する言説を集め、リハビリテーションの臨床実践の場面における「障害受容」の使用に対する問題提起を行った¹。そこで明らかになったことは、これまでの「障害受容論」は「段階理論」²で説明されることからわかるように、ある到達点が想定され、そこに到達できればその後は不変であるような描かれ方がなされるが、実際には、そうきれいに段階を経るものではないということであった³。そうした事実はいわば理論の現実との不整合性を指摘するものであったが、では、一度到達できればその後は不変なのであろうか。つまり、一度、肯定的自己像が形成されたならそれは永続するものなのであろうか。あるいは、肯定的自己像が形成された後にもそれが揺れ動くとするればそれはどういった事象が起因しているのか。

本稿では、さしあたり「障害の受容とはあきらめでも居直りでもなく、障害に対する価値観（感）の転換であり、障害をもつことが自己の全体としての人間の価値を低下させるものではないことの認識と体得を通じて、恥の意識や劣等感を克服し、積極的な生活態度に転ずること」という上田の障害受容の定義（上田 [1980]：516）を採用することとし、中学校・高校時代に徐々に視覚障害が進行し、大学生時に光がわかる程度となった男性の障害と生をめぐる「語り」のなかから、特に「自己肯定感の形成」「羞恥感情の揺れ」に注目し、それらの関連性を「語り」から紐解く作業を通して、上記の疑問に対する1つの回答を導出していきたい。

ここで本研究の特徴について確認しておく。障害を持つその人自身の経験についての「語り」を通して、その人にとっての障害の持つ意味を明らかにしていこうという本研究の志向性は、ライフストーリー研究と位置づけられるかもしれない。

田垣 [2003] は、ライフストーリー研究の考え方について、個別性、物語思考様式、時間軸を有する、聴き手と話し手の相互行為より紡がれる、などの特徴を指摘するが、それらは、本研究の対象である「語り」の特徴と合致するものと言える。また、田垣 [2003] は、ライフストーリー研究を、個人重視・社会文化的文脈重視、援助貢献・脱援助の2軸から4つの分類を行っているが、この分類に従うなら、本研究は、「障害を持ちながら生きることが一体どのような経験なのかを理解することを重視する」（同、p.55）「個人重視・脱援助型」の研究に分類することができよう。

さらに、田垣 [2003：57] は、研究対象を、「問題構成型」と「問題再検討型」に分け、今後取り組むべき「問題再検討型」のテーマとして「障害受容」をあげている。その理由は、この言葉がその意味が十分に検討されないまま医療職に一方的に使用されてしまっているからである。田垣 [2002：351] では、「一旦受容していても、それは不変的なものではなく、場面や時期が変われば改めて受容が必要になると考えられる。障害受容をしたか否かという単純な二分法は慎まれるべきである」という指摘もなされている。つまり、「障害受容」という状態の変容可能性については、非常に重要な点でありながら、まだ実証的には明らかにされておらず、当面の課題となっていることが伺われる。

本研究では、田垣 [2003] の言うところの「問題再検討型」の立場を取りつつ、「個人重視・脱援助型」のライフストーリー研究を通して、上記の疑問に対する回答を探っていくことになる。

キーワード：障害受容、視覚障害、ライフストーリー

* 立命館大学大学院先端総合学術研究科 2004年度入学 公共領域

2 インタビュー対象者

インタビュー対象者は、先天性黒内障⁴による視覚障害を持つ佐藤貴宣さん（以下、佐藤さんとする）、28歳（現在は29歳）。ご本人からの希望により、実名とした。インタビュー時、大阪大学大学院博士課程2年生（現在は3年生）。

3 インタビュー方法

インタビューは、平成17年7月31日に14:00～15:25まで都内喫茶店にて行った。インタビューに際しては、逐語録を作成して学術的データとして使用するために、インタビュー内容を録音することの了解を得た。筆者の研究の主旨については第6回BAS研究会（平成17年5月7日実施）⁵での筆者の報告に参加して下さっており、ご理解くださっていることを前提として、インタビューの依頼をしている。インタビューに際しては、「ご自身の障害を取り巻く様々なことについて聴かせてほしい」と依頼をしたが、それ以外については特に質問票も用意はせず、自由面接法⁶により自由に語ってもらった。

個人データの取り扱いについては、佐藤さんより特に注意、希望はなかったが、念のため、草稿が完成した段階で佐藤さんに文章を読んでもらい、本稿における個人データの取り扱いについての了解を得た。

4 分析方法

佐藤さんが生育歴として語ってくれているので、語りの順序に沿い、主に時系列的に整理を行った（以下、1）～3）、5))。その中で、例えば、盲学校での教育について等、佐藤さんが、さらに詳細に語っていた部分については、項目立てをして、佐藤さんの真意から逸れないよう注意しながら要約を行っている（以下、4))。また、本研究において特に注目している点、つまり、「自己肯定－否定感」「羞恥感情の揺れ」の部分の語りについては、重要な部分であるので、筆者の要約で佐藤さんの語りの微妙なニュアンスが消去されてしまわないよう、また、分析の際のしっかりとした根拠の提示という意味合いも含め、逐語録を掲載することとした（以下、6))。以上の作業により、インタビューから得られた内容については、ほぼすべて網羅されている。

考察において、以上のように整理したインタビュー内容を、①障害状況・障害変化、②自己肯定－否定感、③羞恥感情、の3つの視点から分析を行った。

5 インタビュー結果

1) 小学校の頃

視力は弱視程度であったので、普通に自転車に乗ったり、釣りをしたりして遊んでいた。小学校の頃は、目が見えなくなるということの実感はなかった。知っていたか否かの記憶もない。ただ、黒板の字が見えづらい、鉛筆を濃い鉛筆に変えるなどの変化はあった。それにしても、佐藤さんにとっては「勉強に興味もなく、特になんてことはない」ことだった。しかし小学校5年生頃より急に視力が低下し始める。その頃の記憶に残るエピソードとして、父親が近所の子どもたちを交えてキャッチボールをしたときのことがある。佐藤さんの視力では、ボールを取ることは難しかった。その時、悔しさのあまり父親に対して「なんでおめえはおれだけ遊ばんねえのにそういう遊びすんのや」と怒ったのだった。その頃に、なぜ自分の目だけ、と親にあたることはよくあったと言う。親も「障害児を生んでしまった」と自責の念にかられた時期であった。

2) 中学校の頃

中学校からは、地元の小学校を離れ、家から30分程度のところにある盲学校へ電車通学することになった。盲学校への進学は希望ではなく強制的にであった。最初の1年半は、母親が仕事を辞め通学に付き添った。中学校3年

生の頃に、自転車に乗っていて電信柱にぶつかり田んぼに突っ込んだことがあった。「命がいくつあっても足りない、もう自転車に乗るのはやめよう」と思った。筆者の「見えないことがわかることはショックではなかったですか？」の質問に対し、「盲学校の生徒たちのなかには自分より見えなくてもうまくやれてるやつがいるのに、こんなことでショックを受けるのは嫌だった、まあ、歩ければいいわなと思った」と返す。とはいえ「小学校、中学校時代は、つまずいたり、ぶつかったりするたびに、悔しかったり、つらかったり、悲しくなったりしていた」とも語る。

3) 高校の頃

高校2年生ぐらいになると、ほとんど見えなくなってきた。高校2年生の終わり頃、たまたま友人との話のなかから視覚障害者でも大学に進学できることを知る。「おれ、大学いきてえよ」と思い、先生のところに相談に行くも、「ばかばり言うな（ばかなことを言うな）」と言われる。それまで「どうせ理療⁷でしょ」と思い「人生を諦めていた」佐藤さんは、ほとんど勉強をしてきておらず、習熟度クラスで一番低いクラスにいた。先生からはそのように言われるも、大学に進学する意志は変わらず、一年間の浪人生活を経て、希望どおり、大学進学を果たす。

4) 盲学校での経験

入学して驚いたのは、その人数の少なさであった。同学年は佐藤さん含めて12人だった。そして、入学式の際、隣の男子がさりげなく手引きをしてくれた。それが佐藤さんにとってはカルチャーショックだった。

盲学校の頃にもっとも嫌だったことは、交流教育であった。地域の小・中・高校生との交流である。交流教育では、「やってもらったらありがたいと言え、お前ら迷惑かけながら生きてるんだぞ」という先生からの潜在的なメッセージがあったと感じている。

また、佐藤さん自身、視覚障害者が大学に進学できることを友人から教えてもらって知った経緯があり、学校側からは進路についての情報が十分には提供されなかったと感じている。それには、盲学校教師の、視覚障害者は、はり・あんま・マッサージ・理療に行くものという常識的障害観への囚われが影響していると考えている。

5) 大学進学後

大学に進学した当初は、盲学校卒ということに対して劣等感があった。「自分は障害者であり、盲学校しか知らないの、人と喋れるか」と心配だった。「目悪いやつらとばっかし関わってきて、一般の人たちとうまくやっていけるのか」と。心配するまでもなく、友達はすぐにできた。だが、友達との関わりの中かで、「周囲の人たちはいろいろなことを知っていて、賢いが、それに比べて自分は話題が少ない」と感じるようになる。だからいろいろな勉強会や学習会に参加した。そうしたなか「世の中は多様なんだな」と感じるようになる。様々な人との関わりの中かで、障害者の問題を考えていくときに、「インテグレーション」や「インクルージョン」という視点、分離教育を問題化する言葉があることを知り、「良かった」「俺の考えたこと、全然間違ってたんだ、高校時代、漠然と、一緒の方がいいじゃんって思ってた」と思った。その他にも、山田富秋⁸先生が『生の技法』⁹という本を紹介してくれたりし、それが、1つの思想としてあり、運動として展開されてきた経緯を知り、「障害者はわがままでいい、今まで、人の言うことを聞け、ありがとうと言えって教えられてきたけれど、でも、そうじゃない。もっと、人にどんどん依頼していいし、どんどん頼ってもいいし、それが当たり前なんだ、そういう関係の中で生きていくのが人間なんだ」というメッセージを受け取り、それは、自身の障害観に対しても大きな変容をもたらした。これまでは、例えば電信柱にぶつかる、そうすると、「くそー、おれは障害児、やっばつらいなあ」だったが、今は、「あ、いてえ、柱にぶつかってしまった、終わり」である。確かに不自由を感じることはある。例えば墨字の手紙が来たとき、それを読むことはできない。これまではそんなとき、「おれは見えないからダメだ」と思っていた。今はまったく異なる。「わかるように点字で書けよ」と思うようになった。思考の枠組みが「社会モデル的思考」¹⁰になった、と語る。

6) 土地に付着する羞恥感情

佐藤さんは、盲学校を卒業後、大学進学のために宮城から京都にきて以来、約10年間、関西圏域（現在は大阪）で

一人暮らしをしている。「障害が否定的感情を呼び起こすことがありますか？」という質問に対し、「宮城に帰ったら、嫌」と答える。宮城の実家の周辺は、昔は普通に歩き、自転車にも乗っていた街である。親の知り合いもいるし、自分のことも知っている。「佐藤さんの息子、あんなふうになって」と思われるのがまず嫌、というが、「昔の居た街で白杖つくってというのは、何なのかな、この気分は。うまく言語化できないな」とも語る。その後、佐藤さんは、この不可解な気分を言語化する努力を続けてくださる。

ちょっと待ってくださいよ。ええと、何だべ。何が嫌なのかな。恥ずかしいんですね、一つは。なんか、やっぱり障害者……。新しい自分を……。なんか恥ずかしい。障害者っていうことが恥ずかしいんですよ。やあ、恥ずかしいなって、こう思うんです、そのときの。周り、おれのことよく知ってる町だっという、今までは普通にやってたところに、いきなり障害者になって。それは、なんだ……。ちょっと待って。恥ずかしいだけでは。でも恥ずかしいのがまず一つで。それだけじゃない気がするんですよ。ちょっと、まだ舌足らずな気がするんですけど。

その不可解な気分には、まず、「障害者」となった新しい自分が「恥ずかしい」気持ちがあると指摘する。また、それは、親の障害に対する態度が影響しているようである。

すぐ、「もういいよ、別にここ、白杖持たなくたっていいから」つつって言うから、ああ、恥ずかしいんだべなと思う。だから、そういうのもあって、親も居るし、多分、周りの……。うちの家っていうのは、母方、田舎なんで、結構密集して住んでるんですよ。大河原の町の中に、みんな、うちの母方のいとことかきょうだいとか、全部住んでるんですよ。だから、そこというのは、白杖ついて歩くと、なんかみんな、結構、やっぱり出して歩かない……。するのを嫌がってるのかなって気が、おれ的にして、で、おれ自身もなんかこう、恥ずかしいな……。なんで恥ずかしいのかなとかって、やっぱりそういう……。この恥ずかしいなと思うのは何なのかな。

しかし、そうした感情は、現在生活している大阪では生じないという。

聞き手 でも、別にそこでじゃなければ、例えば、大阪とかだと、別にどうってことはない話ですよ。佐藤さん 全然どうってことないですね。やっぱ、この、生まれ育ったところが……。恥ずかしい理由が、だから、説明がつかないですね、なかなかこう。

それには、街に付着する「イメージ」も関係するという。大阪に対する佐藤さんのイメージは、開放感があり、障害に対しても、過度の関心を寄せず、理解がありそうに見える、とのこと。

あ、これ、イメージも大きいかな。大阪についてのイメージっていうの、やっぱりちょっと、開放感があったりとか、障害者たちに対して、ある程度無関心だったり、ある程度、何ていうのかな、であって、理解がありそうに思える。実際あるかどうかは別として、そういう、僕的なイメージですよ。

それに対して、生まれ育った街に対してはどうだろうか。それに関連する逐語録を集めてみた。

佐藤さん やっぱり、イメージとして、大河原っていうのは、人口小さいし、目悪いやつなんかもおれたちしか居ないし。おれと弟くらいだし。ああ、そうか、弟の友だちとかに見られるのも恥ずかしいなと思うんですよ。弟の友だちとかは、結構よく、昔、おれのうちに来てたんで。で、おれが白杖ついて歩くなんて見たことないんですよ、弟の友だちは。そういう人たちに […] ああ、あいつ、白杖、兄貴はやっぱり、あんな、目悪いのかみたいなふうに使われても嫌だし。そこら辺は結構。そこら辺でいって、むし

ろ、じゃあ、そういうのを……。だから、そういうことがあって、結構、地元の方では白杖持てないんですけど。[...] そういう部分が、やっぱり、この地元っていうところが大きっているのがありますね、なんかこだわってること。だから、自分で、ほんとは歩ける距離なんですよ。おれ、自分の家から大河原の駅まで、歩いて10分くらいなんですけど、いつも迎えにきてもらってるんです。で、親も迎えにきてくれるんです。で、親も、危ないからって言うんです。だって、そんな危ないわけじゃないんですよ、おれ、なんぼでも、大阪だって、京都だって、ここだって、一人でちゃんと行けるわけだから。

聞き手 そうだよな、あちこち行ってるもんね。

佐藤さん でも、僕自身が、やっぱり、白杖について、大河原の町の中を、多分こいつら、おれの……。初めて障害者見るだろうなって感じですよ。視覚障害者、こう、杖ついて歩いているの見るの。ああ、恥ずかしい、なんか恥ずかしいみたいな。なんか、でも、それで、うちの親のこと知ってるかもしれないからね。

聞き手 なんか恥ずかしい？

佐藤さん うん、恥ずかしいのか……。

聞き手 なんででしょうね。

佐藤さん そのときに思うのは、やっぱり、くそ、障害者と思われたくねえみたいな。これはなんなんですかね。だから、それ、恥ずかしいんですかね。だから、そういう気分なんですよ。うまく言語化はできないんですけど。

聞き手 それは、何ていうのかな、じゃあ、佐藤さん自身、例えば、見えていたころの自分と、今の自分っていうものを比較して、決して今の自分が恥ずかしいわけではないですよな。

佐藤さん うん、ないです。全然ないですね。

聞き手 それはやっぱり、じゃあ、町とか土地とかとの……。

佐藤さん そう、関係ね。

聞き手 関係に、やっぱりすごく。

佐藤さん うん、とらわれてるとか。

佐藤さん イメージですよ。そういう、ほんとに、ここでは盲人はあんまり生きにくいんじゃないかとかいうイメージとか。こっちだったら、例えば大阪だったら全然いいやとか。

聞き手 それは、やっぱり、盲学校でのとか、いろいろな経緯が、その土地に付着してるんでしょうかね。

佐藤さん そうですね。だから、あそこにいることもあるかもしれない。

聞き手 培われた、何かイメージっていうものが、その、土地っていうものが……。

佐藤さん ええ。そうだね、そこら辺難しいですよな。だから、あんまりおれ、大河原で、ほんとはあんな、あそこの町行くと、ほんとに歩きやすいので、一人でどンドン、どこでも行けそうなんですよ。でも、ほんとにこの何日間か、おれ、やっぱり一人で歩くの嫌で、白杖持って歩く……。なんで、嫌なのは、多分、親が心配するのも嫌なんで。親がいちいち、歩くと、あれ、何やってんと言われるんですよ。やっぱり言ってくるし、親も。それは、どういう気分で言うか分かんないですよ。ただ、子どもが白杖持って歩くの、恥ずかしいから言うのか、ほんとにおれのこと、ただ心配して。親が、おれがどれだけ、大阪で行動してるかとか、歩いてるかなんて、知らないから。そういうこと、言ってくるんですよ。だから、そういうのを言われるのも嫌だし、親だけじゃなくて、周りも。うちの親も住んでるし、あと、親の姉も住んでる。で、うちの母親のきょうだいと、うちの母親の両親と、両方住んでるんですよ。で、みんな結構住んでるんですよ。だから、みんなにこう、何ていうかな、いちいちそう、心配されながらとか、あるいは、貴宜が一人でやること恥ずかしいなと思われてるのかなと思うと、やっぱりこう、一人で歩くのも躊躇されるっていうか。で、そしたら、なんかちょっと駅に行くときだって、なんかこう、普通に迎えにきてもらうし、で、おれ自身も恥ずかしいから、迎えにきてって言うし。ほんとに歩くの10分くらいだから、そんな歩けない……。で、それも真っ直ぐなんですよ、家まで。そんな歩けないことないんですけどね。だから、ほんとに、大阪とかに出てくると、すごい楽ちん、気持ち的に全然。

そこの土地に対する、おれの、まずイメージは、保守的だとか、なんか全然障害者に対して理解ないとか、なんかそういう、まずイメージが先にあって。で、だから、そういう白杖持ってて、ジロジロ見られてんのかなとかね。なんか、それも、好奇の目で見られてんだらうなと思ってしまう。で、特にそんなことを、いちいち感じてしまうところがあって。別に、そんな、いいんですけどね。大阪とかに来たら、全然、どんな、なんぼでもないっていう感じなんですけど、全然その……。

うちの母親が一番末っ子なんです。で、上に姉と兄が居るんです。で、それぞれ家族を持っているんですよ。それで、そこに、それプラス、うちのじいちゃんとかあちゃん、うちの母方の祖父と祖母が住んでるんですよ。すると、そういう人たちが、大河原って町の中にゴチャッと住んでるから。やっぱり、その人たちがあんまり、かわいそうだと思うてるんですよ、おれのことを結構。多分。いや、これイメージですよ。かわいそうだと思うてるであろうと、おれは予測してるんですよ。だから、そういうふうな推測があるから、やっぱり、何ていうかな……。推測があって、で、あまり、一人でやったら危ないとか思ってるのかも……。おれが京都行ったり、ここ行ったの知ってるから、そんな思っていないかもしれないけど、やっぱり、地元で歩くのに対しては、いちいち、いろいろ、気を回すだらうとか。あるいは、さっき言ったように、恥ずかしいと思うだらうなっていうのがあって、それも一つの、おれが地元でなかなか思うようにで行動できないことにつかえになってる。地元の大河原町で。大河原町以外だったら、大体どこでも行けるんですよ。仙台だって、すごい普通に。大河原町がまずいんですよ、ここは。

以上の逐語録をまとめると、生まれ育った地元の街は、親族もたくさんいて、その人たちから、「障害者」である自分は「かわいそう」と思われているであろうという推測がある。佐藤さんは、この地元の街について、「保守的で、全然障害者に対して理解がなく、好奇の目で見られる」というイメージを持っている。そして、この街に帰ると、「くそ、障害者と思われたくねえ」という気持ちが生じる。現在生活している大阪では、まったく生じない気持ちである。また、親は、白状を持って佐藤さんが町中を歩くのをよしとはしない。それは、親が「恥ずかしい」からなのか「心配している」からなのかはわからない。しかし、佐藤さん自身も、地元では思うように行動が取れず、たった歩いて10分の距離でさえ、親に迎えに来てもらう。大阪ではまったく考えられないことである。

6 考察

以上の結果を、「小学校」「中学校」「高校」「大学・その後」の時間軸を横軸とし、「障害変化」「障害肯定—否定感」「羞恥感情」の3つの分析視点を縦軸とすると、次のような図式を描くことができる(図1)。

	小学校	中学校	高校	大学・その後
障害変化	弱視	悪化	ほぼ全盲	
障害肯定—否定感	否定			肯定
羞恥感情	ある			ある(地元)、なし(大阪)

図1 時間変化と障害・障害肯定感・羞恥感情の変化との関係

この図式から、次の3点が指摘できるであろう。まず、障害の肯定—否定感は、障害の重症度とは連関しないこと(障害が重いから否定感が増すわけではないこと)、もう1つは、否定感と羞恥感情は、それが生起する関係性とともに深い関わりがあるだろうということ、3つめは、肯定感が形成された後にも、障害にまつわる否定感・羞恥感情は再燃するものである、ということである。

本研究の目的は、「一度、肯定的自己像が形成されたならばそれは永続するものなのであろうか。あるいは、肯定的自己像が形成された後にもそれが揺れ動くとするればそれはどういった事象が起因しているのか」という疑問に対し、

1つの回答を導出するというものであったから、3つめについて、さらに考察を進める。

まず佐藤さんの場合、否定感が形成された場・人（宮城）と肯定感が形成された場・人（関西）が異なっていることが指摘できる。その対比は、佐藤さんの語りのなかでも特徴的なものであると考える。佐藤さんが大学受験をする（また、大学進学を果たす）ということは、これまでの視覚障害を持つ人の進路としては（特に佐藤さんが教育を受けた盲学校では）常識を越えるものであった。つまり、佐藤さんの宮城から関西へ生活拠点を移すという行為は、ただ場所を移動するという意味合いだけでなく、これまで佐藤さんが受けてきた盲教育における常識的障害観の「枠」を越境する意味合いを含み持っていたことをまず確認しておく必要があるだろう。もっと言えば、宮城において形成された障害に対する否定感・羞恥感を改変しようという（潜在的にであれ）意図が含まれていたと考えてよいだろう。

具体的には、佐藤さんは、宮城の人たちに対して、「保守的で障害者に全然理解がなく」、「好奇の目でみる」、「かわいそうと思われる」という「イメージ」を持っている。それには、むしろ、これまでに蓄積されてきた経験が大きく影響しているものと考えられる。例えば、親が障害児を産んだことに対して自責の念にかられていたこと、一般の中学校への進学が適わずやむなく分離された教育を受けざるを得なかったこと、障害を持っているがゆえに将来への希望が持てない時期があったこと、教育者から進路についての十分な情報提供を受けられなかったこと、迷惑をかける存在としてみなされること。おそらく、今回得られた語りは、佐藤さんの障害に対する否定的経験・差別的経験のほんの一部にすぎないだろうと推測される。こうした否定的経験・差別的経験を総称して「スティグマ経験」¹¹と表記しておくことにする。つまり、佐藤さんの障害に対する否定感・羞恥感情の源泉はこうした「スティグマ経験」によるものと言って大きな間違いはないであろう。さらに言えば、佐藤さんにとって、それらの経験は、感覚・感情という自己制御不能な領域を浸蝕するほどに、深く突き刺さる経験だったのである。

佐藤さんは、宮城の街中では「障害者と思われたくねえ」「白杖を使用したくない」とも語っていたが、「白杖」は視覚障害があることを表象するものであり、これは端的に言って、「スティグマ経験」を回避しようという意図があるものと解釈できる。

さて、本稿では、「障害の受容とはあきらめでも居直りでもなく、障害に対する価値観（感）の転換であり、障害をもつことが自己の全体としての人間的価値を低下させるものではないことの認識と体得を通じて、恥の意識や劣等感を克服し、積極的な生活態度に転ずること」という上田の障害受容の定義（上田 [1980] :516）を採用したが、佐藤さんの場合はどうだろうか。故郷を離れ、一人暮らしをしながら自分の行きかかった大学・大学院進学を果たし研究活動を行う佐藤さんは、盲学校の学生の中なかでも一際目立つ経験を有する人ではないだろうか。少なくとも消極的な生活態度とは思えない。そしてまた、関西における様々な学びを通して、佐藤さんは、「障害のスティグマ化」を問題化、あるいは、否定する思考法を習得する。しかも「開放感があり、障害に対して理解がある」という関西に対するイメージがあるように、佐藤さんは、関西では、白杖を使いどこにでも行けるし、友人もたくさんいる。つまり、障害がスティグマとはならない関係性を幾重にも構築してきたわけであり、そうはならない関係性が存在可能であることも十分に了解している。つまりこの定義に照らせば、佐藤さんは「障害受容している」と十二分に見なされるのではないだろうか。

そうであっても、（という接続詞が筆者は適当であると考えるが）、感覚や感情など自己においても制御不能な領域へ浸透している「スティグマ経験」が、経験を生起させた場・人に対する「(否定的) イメージ」を形成し、否定的感覚や羞恥感情を再燃させることがあることを佐藤さんの語りは教えてくれていると考える。当然のことと言えるが、認識・思考の領域は、他者経験を含み持つ感覚・感情の領域と直接的に連動はしないと見える。ゆえに、いかにその後、障害に対する肯定的ロジックや関係性における肯定感を獲得しえたとしても、「スティグマ経験」は、感覚・感情によって、その後の経験とは置き換え不可能な、唯一無二の経験として佐藤さんに刻印されているのだと言える。

以上より、本研究の問いである、「一度、肯定的自己像が形成されたならそれは永続するか、肯定的自己像が形成された後にもそれが揺れ動くとするればそれはどういった事象が起因しているか」の回答としては、過去の「スティグマ経験」により形成された否定感・羞恥感情については、その後、肯定的自己像が形成されたとしても、「スティグマ経験」に起因する場や人に対するイメージが引き金になり、そのイメージが喚起される状況設定において再燃

する可能性はあること、またそれは本人の意志的行動を規定・限定する大きな要因となる、ということが1つの回答として指摘できると考える。

こうした結論は、「スティグマ経験」の生じない関係性の大切さを提唱することになり、それは当然、大切なことなのだが、2つの理由から、そうした主張をとりあえず拒絶しておきたい。1つは、冒頭で述べたように、本研究は、「個人重視・脱援助型」の研究と位置づけており、援助論の展開ではなく、むしろ、佐藤さんの障害と生をめぐる経験をより深く理解していこうという志向性を持っているからである。もう1つは、筆者は、この佐藤さんの経験を、そうした帰結に安易に結びつけることが、腑に落ちなくもあるということがある。そこで、なぜ筆者がそう思えるのか、そのことを考察したい。

筆者が佐藤さんへのインタビューを通して最も強く残ったことは、佐藤さんが「スティグマ経験」にさらされた投げやりな自分を立ち上げらせ、おそらく努力と挑戦心と自立心を持って関西の地に自分の足で降り立ち、自己を肯定できる関係性を築いたり思考法を学んだりして創り上げた肯定的自己像が、呆気なく、と言えるほど、過去に植え付けられた土地や人のイメージとともに再燃する否定感覚や羞恥感情によって浚われていってしまうという事実である。佐藤さんは、そうした否定感覚や羞恥感情をぬぐい去ろうとして肯定的自己像を築いてきたはずにも関わらずである。

ここでいま一度、上田の障害受容の定義を確認しておく。「障害をもつことが自己の全体としての人間的価値を低下させるものではないことの認識と体得を通じて、恥の意識や劣等感を克服し」とあるが、佐藤さんの「語り」を通して見えてきたことは、「(障害が) 人間的価値を低下させるものではないことの認識と体得」と「恥の意識や劣等感の克服」との途絶についてであった。それは私たち各々の経験を振り返ってみても、全く想像し難いことではないかもしれない。固有の経験やイメージのなかに恥の意識や劣等感が押し込まれ、たとえ揺るぎない肯定的自己像を武装しえたとしても、その経験やイメージが喚起されることで、押し込まれた羞恥感情や否定感が自己制御不能なものとして再び立ち現れるということが、である。とはいえ、たとえそうした事象を私たちが想像できようとも、その経験は、やはり、唯一無二の経験なのである。そうした唯一性によって「スティグマ経験」と羞恥感情や否定感とは結ばれている。

私たちが、佐藤さんの「語り」から、すぐさま「スティグマ経験」の生じない関係性の大切さを導出しようとするとき、筆者には、それとともに、肯定的自己像へ到るまでの道のり、そして、「スティグマ経験」と分かちがたくある羞恥感情や否定感までも、同時に霧散してしまうように感じられるのだ。極端な言い方だが、「スティグマ経験」こそが、佐藤さんの「語り」=人生を形成していることがわかるだろう。だからといって、「スティグマ経験」を奨励しているわけでは断じてないのだが、「スティグマ経験」は、佐藤さんの人生の厚み分の、佐藤さんへの影響力を持ったものであったとは言えるだろう。その影響力とは、言い換えるなら、存在や障害の価値をめぐる政治へ向かわせる原動力のようなものとしてあったとも考える。

「関係性」「相互作用」への着目は、(有り体に言えば) AさんからBさんへの行いについて、良からぬ部分(障害に対する否定、差別)を差し引いたものにしなすという提案だが、スティグマの源泉を辿ると、それは、単純に関係性から生じるものでもなく、関係性を取り巻く一般社会に浸透する価値や規則、あるいは規範から大きな影響を受けていると言えるだろう(立岩 [1997, 2003]、天田 [2004])。つまりそこに、単純な算術における解決の困難が、まず示される。もう1つは、「スティグマ経験」を「差し引くもの」として扱うことの困難性である。つまり、本研究における佐藤さんの「語り」からは、そうした算術的発想として「スティグマ経験」を扱うことはもはやできない、ということである。その理由は上に再三述べてきたとおりである。つまり、佐藤さんにとっての「スティグマ経験」は、佐藤さん自身を形成する幾重にもなる血流にすでに溶解しているため、それは否定したり肯定したりできる価値的世界を存在することはもはやできないと考えられるのだ。それゆえに、私たちは、佐藤さんの「語り」を得、安易な関係性主義に陥るのを避け、価値的判断を迂回し、別の場所へ行く必要があるように思われる。

最後に、「障害受容」について考察を加えておく。本研究は、至極単純な結論とはいえ、「障害受容」という状態の現実状況における不適合性を示すものであったと言える。しかも羞恥感情や否定感覚は、他者の言動や態度が起因して形成されたものであり、佐藤さんの生は、その羞恥感情や否定感覚を乗り越え、いかに肯定的自己像を獲得していくかの歩みだったと言える。佐藤さんの障害をめぐるその生は、他者から付与された障害への価値付けをい

かに否定から肯定へと変容させ、羞恥感情や否定感覚から自由になるか、というものであった。それは逆にいうなら、他者による障害への否定的な価値付けという契機さえなければ生じ得なかった生の振幅とも言えるだろう。ということは、そうした社会をも含めた他者による障害への否定的な価値付けがなければ、「障害を受容」という、個人が行う障害への否定から肯定への変換の営みも要らないという帰結を導き出すことになる。やはり問われるべきは、社会や他者が有する「障害の否定観（感）」であると言えるだろう。

〈註〉

- 1 「障害受容」は、個別・独特の「障害」経験を、正常や標準からの不足や欠落、回復や補いが期待されるものとしての「障害」に規格化し、そのように読み替えた「障害」を「受容」することを要請するという専制性を内在してないか。また明確な方法論が示されず、支援の過程ではしばしば「尊敬や誇りの回復」よりも「逸脱した感情や態度の統制」に視点が置かれてきたきらいがあったのではないか、という問題提起を行った。その後、研究を進展させ、田島 [2006a, 2007] において、実際のリハビリテーション臨床における「障害受容」の使用法について、臨床作業療法士にインタビュー調査を行い、実証的に明らかにした。田島 [2007] は、修士論文として書かれた田島 [2006a] を投稿論文として書き直したものである。田島 [2006a] には詳細な逐語録データが掲載されている。また、田島 [2006a] は、冊子にして販売中である。詳しくは<http://www.arsvi.com/b2000/0608ta.htm>をご覧ください。
- 2 「段階理論」については、Cohn [1961] と Fink [1967] によって提唱された後、日本においては、1970年代のリハビリテーション領域の学術雑誌には、段階理論を紹介したり、段階理論を根拠づける研究がなされたりしていた。しかしながら、1990年代以降は、実際の臨床場面において「段階理論」に沿わないことが多いこと、「モデル先にありき」の思考法が、独断や偏見、幻想を生じさせる危険から、むしろ、批判的な言説が散見されるようになった（田島 [2006b]）。
- 3 受容の過程については、「4段階のプロセスとして説明されるが、そんなにきれいな経過はたどれない」、「一本道でなく、階段状でもなく、ぐるぐる螺旋を描きながら、未だに『いつかできる！』と思ったり受容と逆の方向に行ってみたり」、「やっかいな問題」、「肯定的に受け止めるには随分時間を要した」、というような意見があった。
- 4 黒内障とは、糖尿病や動脈硬化などに基づく変化で内頸動脈が狭くなったために、眼で必要な血流が供給されなくなってしまい視覚に異常が現れるものを言い、一過性の場合と慢性的な場合に分けられるが、先天性のものとしては、leber病という、主に10歳から30歳くらいに、両眼性の視力低下で発症し、その後徐々に視神経乳頭の蒼白化が始まり、通常1年程度で視神経萎縮に至る遺伝性の疾患がある。佐藤さんの場合は、「先天性黒内障」という診断は受けたものの、それ以上はご自身でもよくわからないとのことであった。遺伝病とは聞いていないとのことであった。
- 5 BAS研究会は、立命館大学大学院先端総合学術研究科の院生が主催する研究会である。BAS研究会の説明については<http://www.livingroom.ne.jp/e/bas.htm#about> にある。第6回研究会における筆者の発表内容については<http://www5.ocn.ne.jp/~tjmkk/bas2.htm> にある。
- 6 http://kccn.konan-u.ac.jp/sociology/research/02/1_2.html に詳しい説明があった。自由面接法とは、非指示的・非形式的面接法であり、調査者が自由に判断して質問を構成しながら被面接者から自由な語りを得る調査法である。
- 7 理療とは、東洋医学的治療のうち、按摩・マッサージ・指圧、鍼、灸を総称するものである。その行為は、あん摩マッサージ指圧師、はり師、きゆう師等に関する法律に定められており、医療及び公衆衛生の普及向上を図ることを目的とした国家資格による医療類似行為と位置づけられている。
- 8 京都精華大学人文学部教員。佐藤さんが最初に進学した大学が京都精華大学であった。その後佐藤さんは、関西学院大学を経て、現在在学している大学院に至る。山田富秋さんの編・著作品としては、山田 [2000, 2002, 2004, 2005] などがある。
- 9 安積純子他 [1990]。
- 10 「障害の社会モデル」は、イギリスのOliverが、「医療モデル」と対立する概念モデルとして提唱したものである（Oliver [1990]）。「障害の社会モデル」は、障害を排除したり、否定的な価値付けを行ったりする社会に焦点化をして問題の解決を図ろうとするものである。
- 11 ゴッフマン [1970] によると、スティグマとは、「人の信頼をひどく失わせるような属性」（同, p.12）を言い、そのなかに、障害を含めている。そして、「スティグマのある人を、定義上当然完全な意味での人間ではない、とわれわれは思いこんでいる。この非反省的仮定に基づいて、われわれはいろいろの差別をし、ままた深い考えもなしにということもあるが、事実上彼らのライフ・チャンスを狭めている」（同, p.15）と指摘する。

〈文献〉

- アーヴィング・ゴッフマン [1970] 『スティグマの社会学 烙印を押されたアイデンティティ』 せりか書房.
- 安積純子・岡原正幸・尾中文哉・立岩真也 1990 『生の技法』 藤原書店.
- Oliver M 1990 *The Politics of Disablement* London:Macmillan.
- 田田城介 2003 『〈古い衰えゆくこと〉の社会学』 多賀出版.
- 上田敏 1980 「障害の受容-その本質と諸段階について-」 総合リハビリテーション8-7 pp515-521.
- Cohn N 1961 Understanding the process of adjustment to disability *J Rehabil* 27 pp16-18.
- 田垣正晋 2002 「「障害受容」における生涯発達とライフストーリー観の意義-日本の中途肢体障害者研究を中心に-」 京都大学大学院教育学研究科紀要 48 pp342-352.
- 2003 「身体障害者の障害の意味に関するライフストーリー研究の現状と今後の方向性」 人間性心理学研究21-2 pp198-208.
- 田島明子 2005 「障害を有する当事者の「障害受容」に関する言説」 作業療法24特別号第39回日本作業療法学会誌 p381.
- 2006a 「障害受容-リハビリテーションにおける使用法-」 立命館大学大学院先端総合学術研究科2005年度博士予備論文.
- 2006b 「リハビリテーション領域における障害受容に関する言説・研究の概括」 障害学研究 2 pp207-233.
- 2007 リハビリテーション臨床における「障害受容」の使用法-臨床作業療法士へのインタビュー調査の結果と考察- 年報筑波社会学 (第二期). (現在印刷中)
- 立岩真也 1997 『私的所有論』 勁草書房.
- 2004 『自由の平等-簡単に別な姿の世界-』 岩波書店.
- Fink SL 1967 Crisis and motivation ;A theoretical model *Arch Phys Med Rehabil* 48 pp592-597.
- 山田富秋編著 2005 『ライフストーリーの社会学』 北樹出版.
- 編 2004 『老いと障害の質的 sociology』 世界思想社数学社.
- 編 2002 『実践のフィールドワーク』 せりか書房.
- 2000 『日常性批判』 せりか書房.

Is “Disability Adjustment” Changeable Once Achieved?

An Analysis Based on Life Stories of Visually Impaired Males

TAJIMA Akiko

Abstract:

Through the life stories of visually impaired males, changeability of the status after “disability adjustment” is explored. Conventional theories on disability adjustment suggest that “disability adjustment” remains unchanged once it is achieved. We investigated whether affirmative self-images would last for the remainder of a person’s life, and what factors might change affirmative self-images once they were established. Analysis based on life stories revealed that negative feelings and a sense of shame caused by past experiences of stigma could be triggered to recur if the person again experienced images of the places and people associated with the experiences of stigma. These experiences could thereby become critical factors in defining and limit intentional behaviors.

Key words : disability adjustment, visual impairment, life story